

わらべ唄の意味するもの

檜 島 良 江

現在において、必要とされていないことや、ものの中にも、ふり返ってみるべき点があるのではないのでしょうか。わらべ唄も現在、ほとんど、歌われていません。わらべ唄という言葉のひびきからして、素朴な、あるいはノスタルジアを感じさせますが、この発生の年代も、作詞、作曲者も明らかでないわらべ唄が、どのような唄であるのか、まず最初に唄の性質を明らかにする為に、わらべ唄の語源でもあり、漢語でもある童謡について述べてみます。

この「童謡」という言葉は、「日本書記」皇極天皇巻以下に使われ始められ、今日、歌われている童謡とは違い、一般に人事を諷刺したもので、童謡を「ドウヨウ」とは読まず、「ワザウタ」といい、この「ワザ」は、「ワザハヒ（禍）」または「カミワザ、カムワザ（神態）」、「シワザ（風俗）」、「ワザヲギ（俳優）」などから、所作、芸能等の意で、この「ワザウタ」は、何かの作業をしながらうたう唄であり、また「童」は、子供のみを指したのではなく、子供をも含めた一般庶民階級を指していたわけですが、次第に大人の唄から子供の唄へと、子供のみが主体となって、うたい、現在のように、「どうよう」と読むわけです。

また、わらべ唄は、単独に発生したわけではなく、民謡から派生した唄であり、民謡との交錯がみられるという点については、特に、わらべ唄の中の、子守唄に多くみられます。

次に、わらべ唄の要素として、まず、地方によって言葉もアクセントも違う歌詞と、日本旋法の基本であるド

レミソラの半音を持たない五音音階の陽旋法と、ラシドミファの半音を持つ五音音階の陰旋法から成り立つ旋律があげられます。特に、わらべ唄では、別名、「都節」と言われる陰旋法の影響が強く、わらべ唄の魅力も、この点にあるのではないのでしょうか。次に、わらべ唄の母体でもあり、子供達が長年かけて、伝承してきた遊びの要素、生活に根ざした様々な年中行事、天気天象、動植物などの自然の要素があげられます。

ここでは、特に、生活に根ざした年中行事と、それに付随して唄われたわらべ唄とを関連づけて述べてみます。まず、この年中行事は、信仰心の衰退によって、大人から子供へ移行された行事であり、その子供が主体となつて行なった行事について、ここでは、特に、小正月に行なわれた鳥追い、火祭り、盆、十五夜、亥の子の行事をあげてみました。

まず、氏子入りをすませた子供のみが、この行事に参加する資格をもち、子供を神聖視していたこと、そして、これらの行事からして、神の守護に頼っていた生活がうかがわれます。

鳥追いは、豊作予祝行事のひとつであり、十五日に、子供達が、

その鳥ア何処から追ってきた

信濃の国から追ってきた

何をもって 追ってきた

柴をぬいて 追ってきた
(新鴻)

と、町中を大声で歌い歩きます。

火祭りは、地方によって名称は様々ですが、サイト焼き、サイトバライなどと呼ばれ、小正月の祭典の終わりに行なわれ、子供達が家々の門松、松飾りや正月注連などを集めてきたものを焼くわけですが、その時に、

斉の神の馬鹿めが

出雲崎へよばれて

後の家を焼かれた 焼かれた (新編)

と歌い、その時になるべくおかしなことを言つて笑いはやしたるものとされています。また、この火で団子を焼いて食べると、一年中病氣をしないと言われ、この火を神聖視していたことがわかります。

盆行事においては、仏を、必ずしも各家で迎え入れるのではなく、地域のひとところに迎えてまつるものとされ、その時に、現在の「ママゴト」の始まりとされる「ショウロウメシ」という御飯を作り、供養をしたわけですが、この時に、常の火で作らないように、盆小屋を作ったり、町中を、次の様に歌いながら、歩いたものです。

盆ならさんよ 盆ならさんよ

盆が来たに 帯買うてお呉れ

赤いが良えんか 白いが良えんか

今の流行の縄子の帯

縄子の帯 (愛知)

十五夜は、子供にとっては、公認の悪戯とされている、夜月にそなえた団子を、細い長い竹竿のさきに縫針や釘などをつけて、そつとそつと行くと、団子突きがあり、とられた家でも、十五夜団子は盗まれるほど良いといひます。

また、元来、月見は、月を見るだけでなく、豊作予祝の祭りであつたわけですが、

うさぎ うさぎ

何見てはねる

十五夜お月様 見てはねる

と、歌いながら、月をみたというのは、素朴で、またこの唄も、いかにも「わらべ唄」という感を与えます。

亥の子行事は、西日本においてみられ、猪は、多産ということから、生産の行事にふさわしい為とか、十月が、

亥の月にあたる為等と言われ、「亥の子」と呼んでいるわけですが、子供達が、丸い石塊にナワを何本もつけ、曳き上げて落とし、地面をたたきながら、家々の門口にきて、

亥の子 亥の子

亥の子餅 搗かんもんな

鬼 産め蛇産め 角の生えた子を産め

神酒一杯飲まさんと、こっちのかどを突きほぐぞ

(福岡)

と歌うと、蜜柑・餅・金銭などを与えます。そうすると、「繁昌せ、繁昌せ」と祝いますが、反対に何も呉れぬと、「貧乏せ、貧乏せ」と悪口を言います。

これらの年中行事も、旧暦から新暦に変わることにより、また明治の文明開化の学校教育により、これらの行事の行ないや、歌われる歌が、社会道徳に反するものという考え方になり、次第にうすれていったわけですが、わらべ唄の母体でもある遊びも変化し、現在では、わらべ唄にうたわれるような遊びとは程遠いものになっています。

この遊びも、また、付随してうたわれる、わらべ唄も、単なる遊びではなく、元来は、信仰心からくるものの中にはあり、次第に、子供達が、大人のまねをし、遊びとして変えていったわけです。その中でも、特に目立った遊びが、「中の弘法大師」や「かごめかごめ」、「郵便さん」、お手玉唄などがあげられます。まず、それぞれの遊びと唄について述べてみます。

中の弘法大師

― 鬼遊び ― (愛媛)

― 合唱 ―

中の 中の弘法大師

なぜ 背が低い

立つなら 立ってみよ

―独唱―

お皿の中へ 灸をすえて

痛や悲しや オゲゲのゲ

この歌は、江戸時代の前朗から京阪・江戸を中心として普及し、遊び方は、普通、中央に中の弘法大師が、つまり鬼が目をつぶって、しゃがみ、その周りを大勢の子供が手をつないで、グルグル廻りながら歌い、「立つなら立ってみよ」で皆しゃがむ。その瞬間、中央の鬼は、立って「お皿の中へ……」を周りの子の頭をおさえて数えながら歌い、最後に当った者が代って中に入るといふ遊びで、茨城県などでは地藏遊びともいっています。この唄の、弘法大師は、「小坊さん」の転化したものとされ、山梨、長野では、「中の中の地藏さん」とうたわれ、地方によって、様々です。

この遊びは、昔、大人達が、ひとりの人に親指をかくして、南天の葉で顔をおおわせて、人々の輪の中にすわらせ、人々はぐるぐるまわりながら、「南無地藏大菩薩」と唱え、そのうち南天の葉が動き出すと、地藏尊が乗り移ったとして、紛失物や病氣のこと、作物の出来、不出来、結婚のことなどを聞いたもので、まじめな信仰者だけが集まり、この中にいる人、中座のことをまじめに聞いたそうです。

こうした神の口寄せというものが、遊びとなって、子供達が、真似をし、伝え、同じ様な遊びとして、子供が手をつないで、輪になり、ぐるぐる廻る、問答形式の、あてもの遊びである、〃かごめかごめ〃があります。

この唄は、関東地方を中心に、全国的に分布し、「かごめかごめ」は、もと身を屈めよという意味で、それを鴟の意に転用したといわれています。

かごめかごめ

―鬼遊び―

（千葉）

かアごめ かごめ

かアこの中の鳥は

いついつ出やる

夜明けの晩に

鶴と亀とすうべった

後ろの正面だアレ

次に、お手玉についてふれてみたいと思います。お手玉には、大きく分けて、ツキダマとナゲダマがあり、ツキダマは、座敷や縁先などにすわって、お手玉唄を歌いながら、色々と細かい芸などを競いあったりしたものです。ナゲダマは、この名の通り、庭先などに立って、上に投げあげては受けとるもの、あるいは、壁などにぶつけては受けとるお手玉です。

昔、お手玉は、石を使い、その石を、すくいあげて落とす時に、決めておいた所へぶつつけたということです。が、目標物に投げた石が当たるかどうかで吉凶、豊作、願いごとなどを占った、「石占」の一種であったといわれています。しかし、この物にあてる「石占」は、男の子達の石合戦の遊びに変わってしまい、次第に、女の子達だけで優雅に遊ぶものになってしまったようです。

神社の鳥居の島木や貫にいくつも載っている小石が、このお手玉のはじまりだといわれています。

向うお山で

ーお手玉唄ー

(千葉)

向うお山で 光るものは

月か星か 蛍か

月ならば拝み申すが

蛍なんぞじゃ

あーかんべ

この唄にも、みられるように、月ならば拝むが、螢だったら見むきもしないというように、月見が、豊作予祝の祭りとも関係し、古代の人々が、月とかお天とらさまを拝むという信仰心のあつたことがわかります。

又、お手玉が、本来は、吉凶、豊作、願いごとなどを占った「石占」の一種だったことから、お手玉も、「中の小仏」の遊びと同様に、昔は、まじめな、信仰の一つであつたわけです。しかし、こうした信仰心に似た背景の意味を持つ遊びと対照的に、違つた背景の意味を持つ、縄踏びの遊びがあります。

この縄踏びは、江戸時代に、「縄こぐり」というものがあつたくらいで、縄を踏びこえるという遊びは、明治になってから、出てきた様です。このことは、縄踏びという遊びがないころは、神聖な稲藁で出来ている縄を、そして、縄をなうということは、手を合わせてなうものであり、折りに満たされたものである縄を、踏みつけたり、踏びこえるということは、考えられなかったわけです。ところが、明治の文明開化による学校教育によってはじめられた体操などによって、縄への信仰心がうすれ、服装なども変つたことから、女の子の遊びになつたわけです。

こうした縄への信仰も、大人達がくずしたことにより、子供らも自然と、何の抵抗もなく、こうした遊びをうけいれていたわけです。

郵便さん ー縄踏びー (島根)

郵便さん おーはいり

今日は ジャン ケン ボイ

負アけたお方は 出て頂戴

お嬢様 おーはいり

今日は ジャン ケン ボイ

負アけたお方は 出て頂戴

次に、唄自体が、物語的なものから、短かいものに変ってきているということが、お手玉唄や手まり唄にみられるということについて、少し述べてみます。

手まりは、平安時代の蹴まりから始まったのが、手まりだという説があり、また綿が手まりに使われるまでは、まりはお手玉のような形で使われたと考えられ、まり自体が、ゴムに変ったことによって、唄のテンポは早くなり、又、リズムに主体をおくので、歌詞は意味のないものになっています。生活のテンポが早くなると同時に、ゴムまりに変わり、今日では、子供達の歌う声さえ聞かませんが、こういった遊びにしろ、生活の変化を反映していることがわかります。

子守唄は、わらべ唄の中でも、民謡との交錯がみられるので、ここでは、特別なものとしてあげますが、生活の流れの中においてもいつの時代でも変わらぬものは、母の愛情ではないかと、改めて感じさせます。

しかし、今まで述べてきた、年中行事でうたわれたわらべ唄にしろ、貧しいながらも、心の豊かさはあったという感がしてなりません。

〔参考文献〕

。町田佳章・浅野健二「わらべうた」一九七七年二月 岩崎書店

。数田義雄「わらべうた考」一九六一年七月 カワイ楽譜

。柳田国男民俗学研究所「年中行事図説」一九六二年十一月 岩崎書店